校長室から（R元年度）

ひがしなら通心

茨木市立東奈良小学校　川上　隆　No．52
令和元年１２月５日（木）発行

ある新聞記事より
産経新聞１２／４より

読解力低下 活字離れ影響か

本・新聞読む生徒 点数高く

国際学力調査

３日に公表された国際学習到達度調査（ＰＩＳＡ）で、日本の高校生の読解力低下が浮き彫りになった。文部科学省は、パソコンを使ったコンピューター形式のテスト形式に不慣れなことや、記述式の問題を苦手としていることなどが要因として考えられるとしている。ただ、本や新聞などをよく読む生徒の方が平均点は高く、読解力低下の結果には、読書量の減少も影響しているようだ。（１面参照）

日本の読解力の順位は、前々回の２０１２年調査では過去最高の４位だったが、前回の15年は８位、今回は15位と急落した。

文科省によると、小６と中３を対象に毎年実施している全国学力テストなどでは、特に学力低下の傾向はみられないといい、同省担当者は「今回のＰＩＳＡで読解力がなぜ低下しているのか要因を特定するのは難しい」と話す。

考えられる理由の一つは15年から導入されたパソコンを使ったテスト形式に不慣れなこと。日本の生徒は紙の筆記テストに慣れ、ポイントとなる部分に線を引くなどして思考を深める傾向があるが、パソコンではそれができず、戸惑うケースが多かったとみられる。

また、インターネットのサイトから必要な情報を探し出したり、情報の信憑性を見極めて対処法などを自由に記述させたりする問題の正答率が低かった。日本では選択式問題のテストが多く、記述式が苦手な生徒が多いと指摘されてきたが、ＰＩＳＡでもそれが浮き彫りになった格好だ。

一方で、読書習慣のある生徒の方が平均点が高いことも分かった。小説などを月数回以上読む生徒の平均点は５３１点で、読まない生徒より45点高かった。新聞を同頻度で読む生徒の平均点も、そうでない生徒より33点高かった。

テストのほかにアンケートも行われたが、ここでは活字離れが進んでいる実情も明らかになった。日本の場合、新聞を月数回以上読む割合は21・5㌫で、９年前の09年調査に比べ36・0㌽減少。雑誌を読む割合も30・8㌫で、33・8㌽減少した。

調査では、参加者へのアンケートをもとに保護者の学歴、職業、所有物（乗用車や蔵書の数など）から参加者一人一人の社会経済文化的背景（ＥＳＣＳ）を４つのレベルに分け、それぞれの得点を分析した。

それによると、ＥＳＣＳのばらつきを示す数値が日本は参加79カ国・地域の中で最も低く、各家庭の文化的、経済的水準などの格差が小さいことが分かった。

また、ＯＥＣＤ加盟国で比較すると、日本の場合、ＥＳＣＳが高い上位25㌫の生徒の読解力の平均点は５３７点、下位25㌫は４６５点。得点差は72点で、ＯＥＣＤ平均（得点差89点）を大きく下回った。国立教育政策研究所の大塚尚子総括研究官は「得点差が小さいほど、家庭の経済的格差などが学力に及ぼす度合いも低い。各国との比較では日本は一定レベルの教育が広く行き届いていることがうかがえる」と説明する。

加盟国ではないが、順位の高かった「北京・上海・江蘇・浙江（中国）」の得点差は82点、シンガポールは１０４点で、いずれも日本より格差が開いた。

家庭の経済的格差 学力への影響小さく

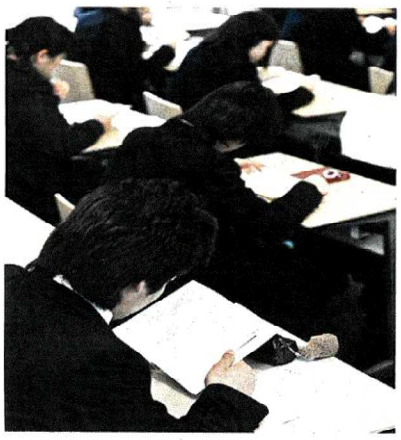
ＰＩＳＡで、日本の平均点順位は前回より後退したものの、家庭における社会・経済・文化的な水準の格差が学力に及ぼす影響が、各国に比べて小さいことも分かった。

本などをよく読む生徒と、そうでない生徒の読解力平均点

（「よく読む」は月数回以上読むとした生徒）

	雑誌 読む	雑誌 読まない		漫画 読む	漫画 読まない
日本	502	506	日本	518	489
OECD平均	494	490	OECD平均	492	491
フィクション				**新聞**	
日本	531	486	日本	531	498
OECD平均	523	480	OECD平均	497	489

※□は統計的に有意な差あり



本や新聞などをよく読む生徒の平均点は読まない生徒よりも高かった

プロセス重視の採点

ＰＩＳＡは「読解力」「数学的応用力」「科学的応用力」の３分野とも選択式と自由記述式の問題が出題され、採点方法は問題ごとにコンピューターによる自動式や採点者によるものに分かれる。

日本の場合は文部科学省所管の研究機関「国立教育政策研究所」の担当者が採点を行う。解答までのプロセスや概念の理解が重視され、正答でなくても途中までの解答内容によっては部分点が与えられる。３年ごとの各回で３分野のうち１分野を順番に重点的に調査。経年比較ができるように同じ問題を長期間使用しており、そのため問題は一部を除き非公開。

平均得点の国際比較

順位	読解力	得点	順位	数学的応用力	得点	順位	科学的応用力	得点
1	(27) 北京・上海・江蘇・浙江★	555	1	(6) 北京・上海・江蘇・浙江★	591	1	(10) 北京・上海・江蘇・浙江★	590
2	(1) シンガポール	549	2	(1) シンガポール	569	2	(1) シンガポール	551
3	(12) マカオ	525	3	(3) マカオ	558	3	(6) マカオ	544
4	(2) 香港	524	4	(2) 香港	551	4	(3) エストニア	530
5	(6) エストニア	523	5	(4) 台湾	531	5	(2) 日本	529
6	(3) カナダ	520	6	(5) 日本	527	6	(5) フィンランド	522
7	(4) フィンランド	520	7	(7) 韓国	526	7	(11) 韓国	519
8	(5) アイルランド	518	8	(9) エストニア	523	8	(7) カナダ	518
9	(7) 韓国	514	9	(11) オランダ	519	9	(9) 香港	517
10	(13) ポーランド	512	10	(17) ポーランド	516	10	(4) 台湾	516
	⋮			OECD平均	489		OECD平均	489
15	(8) 日本	504						
	OECD平均	487						

（ ）は前回順位。同じ得点でも順位が異なるのは小数点以下の数値が違うため。
★前回は北京・上海・江蘇・広東で参加

「電子書籍で読書習慣を」 広島大大学院・難波博孝教授

ＰＩＳＡの結果では、日本の高校生の読解力が下がっていたが、要因として、活字に触れる機会が減ったことが挙げられる。社会のデジタル化が進み、本や新聞など紙の媒体を読む環境が失われ、習慣もなくなってきているためだ。代わりに普及が進んでいるタブレットやスマートフォンなどのデジタル機器を使い、電子書籍や文章を深く読む経験を積ませるべきだが、日本は学校でそうした教育が行われていない。

家庭でも有効な活用の仕方が教えられないためSNS（会員制交流サイト）やゲームといった消費的な使い方ばかりがなされている。それでは情報を流し読みするばかりで頭の中に残らず、「活字に触れる」とはいえない。

さまざまな情報を文中から探し組み立て、評価するといった読解力の訓練は、教えてあげない限りはできるようにならない。それに紙媒体で読むのと違ってデジタル機器の画面上で文章を頭に残るよう深く読むという作業も慣れが必要。学校でいち早く教材のデジタル化を進めるべきだ。海外では子供たちが授業で使う教科書の電子化が進められている。

このほか読解力が低迷した要因として大きいのは、調査対象だった高校１年の世代は「テスト疲れ」をしていること。「脱ゆとり教育」の流れで、学力強化に向けて小中学校での全国学力テストをはじめ、自治体によるテストなど、さまざまな試験を課されている。学校の成績に無関係なＰＩＳＡに対しては、生徒は意欲を失っている。（談）

大人（教師や保護者）の役割

～「努力」は「夢中」に勝てない。～

陸上競技の４００m障害でオリンピックや世界選手権に出場した為末 大（ためすえ だい）さんが、初めて子ども向けに書いた絵本「生き抜くチカラ　ボクがキミに伝えたい５０のことば」を出版しました。その中に、『「努力」は「夢中」に勝てない』ということばが載っています。その意味は、本当に強いのは、苦しい努力をがんばって根気よく続ける人よりも、そのことがおもしろくて、つい夢中になっていたという人。「努力」は「夢中」に勝てない。成功のポイントは、夢中になること。だそうです。なるほどと納得してしまいました。

先日、たまたまNHKスペシャル「ボクの自学ノート～７年間の小さな大冒険～」という番組を観ました。自らテーマを見つけて、新聞記事などを使いながら学ぶ「自学」を小３～中３までの７年間、人知れず続けた北九州市在住の少年（梅田 明日佳くん）の記録で、昨年の「子どもノンフィクション文学賞」大賞作を基に描くドキュメンタリーでした。梅田くんもすごいですが、自学ノートに夢中になるきっかけを与えた大人もすばらしいですね。

上の記事の中でも広島大学の難波教授が、読解力の訓練は、教えてあげない限りはできるようにはならないと言われています。我々大人が子どもたちに、読むことの楽しさを手本で示してあげることも必要ではないでしょうか。